



造園家 田中俊光
(株ナインスケッチ代表)

一見心地よさそうな雑木林 しかし実際は風通し悪く 荒れている・・・その理由とは？

Vol.
7

前は西日本の豪雨の災害は現代土木が一つ原因だという話をしましたが、では、どういう考え方で土木工事をしていけばいいのかということに触れていきたいと思えます。

具体的に相談があつた現場を例に挙げ、読み解いていきたいと思います。

場所は、浜松市西区、北東に三方原台地、南西に浜名湖を位置する場所で写真

1、2のような雑木林になります。幹周りが3mを超えるケヤキなどもある雑木林で、周辺は住宅や工場などが立ち並ぶ地域の中では貴重な場所になります。

一見、心地良さそうな雑木林に見えますが中に入ると風通しが悪く木々が荒れ、元気がない木々も見られます(写真3、4)。

これらの原因はどこにあるのかを現在と昔の航空写真(写真5)を見比べて考えていきたいと思います。

昔にはなく現代になり住宅団地や工業団地が周囲に立ち並び、東名高速道路もできたのがわかります。写真5の右上(北東)が三方原台地になりここから南西の浜名湖へ標高が下がっていく土地です。ちようど水脈上に団地や東名高速道路がつくられ土中の空気と水の流れを遮断しているのが読み取れます。

これが、雑木林の荒れた状態を生んだ根本的な原因だと思われれます。人の血管



写真1



写真2



写真3



写真4

が詰まると炎症や病気になるように水脈が滞るとその現地に接する開発でなくても、流域単位で環境悪化していくこととなります。

そこで、水系地形図(写真6、7)を見ていきます。

下流域は浜名湖の入り江の一角の水脈につながり、上流は三方原台地の丘陵地形、もつと広く見ればアルプスの方に繋がっている場所で、谷筋がしっかりと入り組んでいて日当たり、そして風通し含

連載の目的

執筆者の静岡県浜松市の造園家・田中俊光さんは、長い間、造園・エクステリアと建築、まちづくりの融合を考えた「空間づくり」を実践してきた方です。

田中さんの作る「雑木の庭」は、単に鑑賞する場所ではありません。その場にいると、不思議と「人を快適にさせる」空間でもあります。

しかし、中には、どうしても植栽が枯れてしまう場所もあります。どうしてなのか？田中さんは現状に満足しませんでした。その中で「大地の再生」という考え方に出会いました。そして探求を続けていくうちに、日本の住宅のほとんどが、雑木が枯れてしまう酸欠の土壌になっているのでは？という疑問を抱くようになりました。

果たして、現在の住宅業界、そして造園・エクステリア業界に、そうしたメッセージが受け入れられるのか。少しでも快適空間の創造に貢献できる業界にしていければという思いで、新しく連載を引き受けて頂きました。

ぜひとも、この連載を通じて、これからの日本の国土のあり方について、造園・エクステリアの観点から貢献出来ることを一緒に考えて頂ければ嬉しです。

著者プロフィール

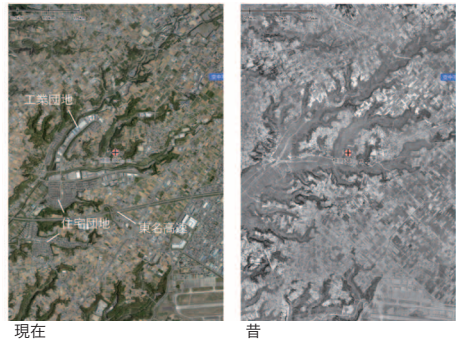
田中俊光 (たなか・としみつ) 1979年東京都生まれ。

2002年、日本大学生物資源科学部卒業。大手住宅メーカーのグループ会社で外構造園専門部門に勤務し、転職後は造園・外構に加え住宅のプランニングも手掛ける。2013年3月に独立し(株)ナインスケッチを設立。雑木の庭をはじめ、エクステリア・外構のプランニング・施工管理に携わる。主な受賞歴：2011年、「ユニソフ フォトコンテスト 2011」ファサードガーデン部門ゴールド賞受賞、2014年、「浜名湖花博庭園コンテスト」浜松市長賞受賞、2014年「第2回ブロックガレージデザインコンペ」入賞、2017年、三協アルミ「エクステリアデザインコンテスト 2017」ファサード部門 ゴールド賞受賞。資格：一級造園施工管理技士、一級土木施工管理技士、エクステリアプランナー 1級、二級建築士。

め、空気と水が通りやすい恵まれた丘陵地系になつていくと読み取れます。

水系を見ていくと緩やかな地形は直線的に蛇行していて、地形が入り組むと曲線の比率が多くなるのがわかります。それは、各地域の大地の地形や土壌によつて変わってくることに

写真5 航空写真



す。合理的で作業しやすい形状、または、土中の空気や水など計算しにくい分野を無視して構造計算の簡単な沈下や滑りや傾きなどの力学的な分野のみで考えている一律的で直線的な形状になつてしまつていきます。

そうするとコンクリートは単なる異物になつてしまいます。そうではなくて、水脈が作つていく地形に倣うようにコンクリートを作つていけばそれがコンクリートではなく自然の石の塊になり得て、自然石の機能を発揮できるようにされるのです。

自然の風化という造作は直線的なものではなく、大地環境と気象環境が生んだ流線型になつていきます。そこに自然の動植物が息する環境が伴つて、その地形を保護するような形で共存型の環境を生み出しています。

その大地環境と気象環境の関係が示してくれている水脈の形状、単位面積当たりの水脈比率をそこに組み込み整備していけば、人がつくるものも自然と一体となり空気も水も滞ることなく、循環型の環境が生まれてくることになります。

ここ三方原台地が天竜川を含めて南アルプス高山帯の地形と中山間地域の丘陵地形から平野に移る緩やかな丘陵地形そして浜名湖を含めた海の地形まで脈で繋がっています。

これだけの見事な血管のような脈が大

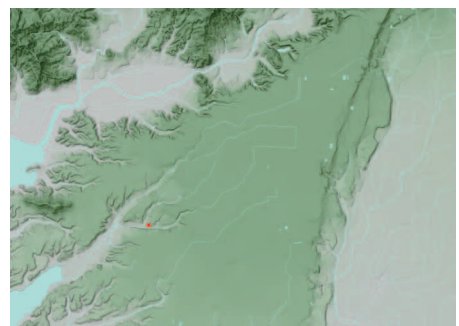


写真6 水系地形図1

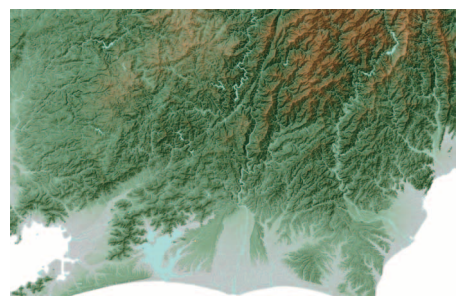


写真7 水系地形図2

地の中に張り巡らされていて、大地環境と生物環境そして海と平野と山をつなぐ気象環境が、地上と地下で連動して安定した循環機能を生み出した時に、この地域がその風土らしく息づく環境が生まれてくるのです。

それを人は無視し、人優先に開発すると、ここは流域環境らしさを失うのは必然だと思えます。人よりむしろ生き物を含めた自然環境が健全に呼吸できるように環境整備をすることで、結局は人にも心地よい環境、風土を作つてくれるのだと思えます。

人のプランが先行するのではなく、現地の自然からの生の情報を取り入れてから後追いで人のプランを取り入れていけば、自然環境の悪化にはなり辛くなると思えます。

**地下水脈上に団地・高速道路が
建ち並ぶ—そんな「人優先」の
開発は、最後に人の命を脅かす**